神の使い
古峯ヶ原の天狗

古峯神社
宮司　石原敬士

古峯神社の御祭神日本武尊のお使いである天狗は、飛翔して崇敬者にふりかかる災厄を除災すると云う古くからの信仰をあつめており、古峯神社は〝天狗の宿〟として広く根深い信仰圏をもっています。

古峯ヶ原の天狗信仰は、日光修験道の開祖である勝道上人が古峯ヶ原深山巴の宿において三ヶ年の修行の後、天応二年（七八二）、日光の男体山に登り得てから、現在の古峯神社を中心とする古峯ヶ原一帯は、日光山二十六院八十坊の僧侶達が修行に励む霊地となりました。

江戸時代には、巴の宿で花供峰、冬の峰の入峰修行のため、日光山の修験僧達が、毎年、石原隼人・主水家の両家に投宿するようになってから、古峯ヶ原の天狗信仰は文化年間（一八〇四～一八一七）にはすでに江戸表にまで拡がりを見せています。その様子は、次の一修験者の修業日記に生き生きと描写されています。「（四月）廿九日　晴天、大芦村立、辰の上刻（午前八時～九時）古婦ヶ原へ行く。大芦村より谷を入る事二里半、昼時着、大家二軒あり本家隠居と云ふ。此家他国にては前鬼と云ひ所々より参詣人多

し。書院奥の間に不動を安置す。主人は俗にて名を隼人と云ふ。社人にも非ず百姓家也。前鬼と云ひ、又天狗使ひと江戸表にては専ら言う事也。因って其因縁由来を悉(ことごと)しく訪ぬるに、世間沙汰の様なる事は一切無し、何れの時より此家建ちたる事等も不分、前鬼と云ひ始めも知れず、又天狗の集り玉ふは当所山中一里に籠(こも)り堂と云ふがあり、日光より一ヶ年に春秋二度宛籠りありて、此堂折々喧(かまびす)しき事ありと云ふ。乍然(しかながら)此堂は常には人の参る所にもあらずと云ふ。（以下略）」（野田泉光院成亮「九峰修行日記」『日本庶民生活史料集成』の文化一四年四月二九日の記録）。この記事から、当時、古峰ヶ原隼人の名は広く知られるようになり、独自の信仰を展開するようになっていたと言えましょう。

又、古峯神社境内の鳥居文書記録等と各地の石碑・市町村史等の史料から、江戸中期頃から古峰ヶ原講が結成されはじめ、江戸後期から幕末にかけて、関東・東北・中部地方と広範な地域に普及して行ったと云えるでしょう。

古峯神社には、今に到るまで、天狗様にまつわるさまざまな不思議が伝えられています。後に崇敬者になる人の夢に天狗様が現れて古峯神社の所在を告げられた話、参籠中に天狗様にお祓いを受けた人の話、神社で祈祷を受けた御札を置き忘れて帰宅して気づいてから天狗様が先に来てお札を届けて下された話など、古峯神社と古峯ヶ原では天狗様が活きた信仰の対象として存在しています。（なお、『下野の杜』栃木県神社だより第二十七号、平成九年発行、の巻末「古峯ヶ原の天狗」を御参照下さい。）